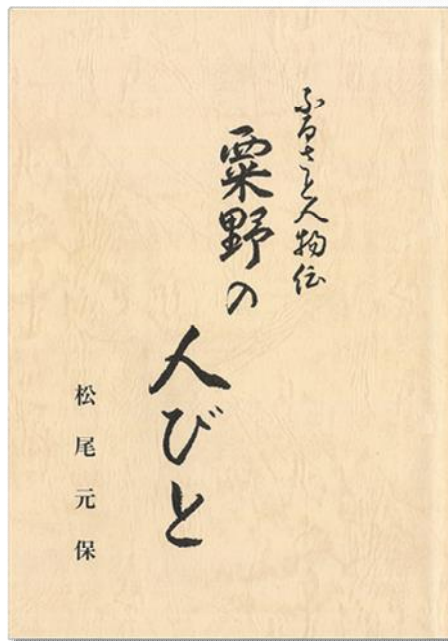


## 第四章 栗野の人びと

平成二年「広報あわの」に、栗野町助役や町議会議員を務めた郷土史家・松尾元保による「ふるさと人物伝」が連載されました。栗野の発展に寄与した人物を紹介するこの連載は、後に『ふるさと人物伝 栗野の人びと』（平成一三年）という本にまとめられました。

本章では、江戸時代の終わり頃から明治・大正・昭和に掛けて活躍した四人の人物を紹介します。教育や産業の発展に努め、地域の礎いしすえとなった人物たちが栗野に残した足跡をたどってみましょう。



▲松尾元保『ふるさと人物伝 栗野の人びと』（栗野町役場、平成13年）

## 新時代のリーダーたちを育てた中條若処

### ●西国からやってきた先生

中條若処は文化元年（一八〇四）、摂津国（兵庫県）に生まれた人です。実名は温恭、通称は清太郎といい、自らを若処と号しました。子どもの頃に父親が亡くなったため、京都の円徳寺に身を寄せて医学を学びました。のちには、大坂の懷徳堂という大きな塾で漢学を勉強しました。兵学にも優れていたといえます。

安政五年（一八五七）、東国を旅していた若処は栗橋宿（埼玉県久喜市）である人物に出会います。江戸から深程村に帰る途中の深程村名主（今の村長）の石川伴蔵たちです。伴蔵から、子どもたちの教育を頼まれた若処は、深程村の長善寺に移り住み、塾を開くことになりました。また、医師として病人の治療をするようにもなります。

### ●幕末の混乱と若処

若処が深程村に来た頃、世の中は不穏な状況になっていました。江戸幕府は長い間、外国との交流や貿易を制限してきましたが、江戸時代も終わりの頃に近づくと、諸外国からの圧力に屈して港を開いて貿易を行うようになっていきます。すると、幕府の弱腰を非難する人たちの間で、江戸の將軍ではなく京都

の天皇を尊び、外国人を日本から追い払うべきだ、という考え（尊王攘夷）が広がっていきました。

若処が深程村に来てから七年後、ついに水戸藩（茨城県の一部）の中で尊王攘夷を過激に主張する一派である天狗党が挙兵しました。このとき、若処が天狗党への参加を求められたという話が伝わっています。

天狗党は日光東照宮、その後は太平山（栃木市）に向かいました。太平山に向かう途中の楡木宿で、天狗党の指導者のひとり武田耕雲齋と若処は面会したといえます。耕雲齋から参加を頼まれた若処でしたが、この挙兵は自分の考えとは違うとして断りました。その代わりに耕雲齋に次の歌を旗に書いて贈ったといえます。

〈表〉赤心報国双龍躍 青史垂名千古香

（国に尽くす真心は二つの龍が躍動するようで、永久に歴史に名前を残すだろう）

〈裏〉人しらす 木かくれてをる もみちそは

ちりてこそ見ぬ あかきこゝろを

（人に知られることもなく木に隠れているモミジは、散るときに真心が分かる）

### ●若処に教わった新時代のリーダーたち

このエピソードからうかがえるように、若処は穏やかで過激

な言動を好まない人だったといえます。そのため、若処の下には、その人柄を慕って多くの若者が集まったといえます。若処の塾で教わった人の数は一三〇人以上といわれ、その中からは、後の衆議院議員の横尾輝吉よこおてるきちや県会議長の安生順四郎あんじょうじゆんしろう（36ページ）などの多数の政治家や自由民権運動家が輩出されました。若処自身は政治活動をすることはありませんでしたが、彼の下からは新時代のリーダーたちが羽ばたいていったのです。

明治七年（一八七四）、若処は故郷から遠く離れた深程において七〇歳で亡くなりました。現在、深程の宮入みやいりの丘の上には、弟子たちが建てた墓と、懐徳堂の教授・並河鳳来なみかわほうらいの撰せんした碑が建っています。墓には辞世として二つの歌が刻まれています。

七十年来何所挙 東遊西教惟堪愧

（七〇年以上生きてきたが何を成すことができたのだろ

うか、あちこちをめぐっただけで恥ずかしく思う）

ながながの 月日を遊びわすれたる

故郷へとぞ 今は帰らむ

（長い月日をめぐって忘れてしまった故郷へと今帰るだらう）

#### 《参考文献》

松尾元保『ふるさと人物伝 栗野の人びと』栗野町役場、二〇

〇一年



▲中條若処の墓（深程）

深程地区宮入の小高い丘の上にあり、墓石(右)と碑が並んでいる。

## 久保田讓之助と久保田堀

現在、口粟野に「久保田堀」と呼ばれる小さな用水路が流れています。この用水路の名前は、用水路工事を指導した久保田讓之助じょうのすけという人にちなんでつけられました。久保田讓之助とはどのような人だったのでしょうか。

### ●豊岡から来た若者

讓之助は、弘化四年（一八四七）、豊岡藩（現在の兵庫県豊岡市周辺にあった藩）の武士久保田周輔しゅうすけの子として生まれしました。豊岡藩の藩校と、近隣で有名だった学者の池田草庵そうあんの下で学んだ讓之助は、二一歳の時、二宮弥太郎に弟子入りするために下野国（栃木県）にやってきました。

二宮弥太郎は、父の二宮金次郎の跡をついで、幕府の命令で日光の農村復興事業を行っていた人です。讓之助の父は二宮金次郎の弟子だったので、讓之助もその縁で二宮弥太郎に入門しました。しかし、讓之助が入門した翌年、江戸幕府は崩壊し、日光での復興事業は終了を余儀なくされます。師匠の弥太郎も下野国を去ることになりました。

### ●日光県の役人になる

下野国に残った讓之助は一人で引田村ひきたの復興事業を続けて

いました。しかし、その事業は新たに下野国を支配した新政府軍によって中止させられてしまいます。讓之助は、事業を続けるために、新政府に嘆願活動たんがんを行い、継続の許可を得ることに成功しました。そればかりか、明治二年（一八六九）になって、下野国に新たに日光県が設置されると、讓之助は役人として採用されることになりました。讓之助は、日光県が行う農村復興政策の担当者はつてきに抜擢されたのです。



▲久保田讓之助肖像（個人蔵）

### ●新しい農村復興政策

讓之助が担当した新しい農村復興政策は、次のようなものでした。

- ① 荒れた田畑を復興する時は、作業者に賃金や米を与える
- ② 自力で田畑を復興するのが難しい場合は、援助する人を派遣する

- ③復興した田畑は、一定期間の間、年貢を取らない。代わりに収穫の一部を新しい場所の復興の元手として集める
  - ④畑を田に変える場合も年貢を優遇する
  - ⑤新たに用水路を作ること希望する時は、開発を指導する
  - ⑥多額の費用がかかる場合は、一部を県が無利息で貸す
- このような好条件に合わせて、当時は米の値段が高くなっていたこともあって、日光県の復興政策は大きな成果をあげます。この復興政策を導入した地域の一つが口粟野村でした。

### ●口粟野村の久保田堀

明治三年（一八七〇）二月、口粟野村は、日光県の開墾局かいこんきょくに新しい用水路を作りたいと願い出ました。この願いは受け入れられて、口粟野村は、県から七カ年無利息の資金援助を受けて讓之助の指導の下で用水路工事を行います。用水の取り入れ口は同村の岡おかという場所に設けられ、長さ一九〇〇間（三・四五km）に及び用水路が完成しました。用水路ができた結果、数十町歩の荒地が田んぼになりました。また、用水を使った水車も設けられ、特産品だった線香生産の役に立ったといえます。

口粟野には、久保田堀の開削に際しての、讓之助の人柄と振るまいが伝わっています。讓之助は、強固な意志を持ち、心が清らかで私欲がなかったといえます。また、村むらの視察の際も、決して接待をうけることはなく、一汁一菜以外のものが出

ても、箸を付けなかったそうです。

岡久保田堀は、昭和四四年（一九六九）の耕地整理によって、大部分がかつての姿を失いました。しかし、その水は、今現在も口粟野に豊かな実りをもたらしています。

### 《参考文献》

久保田堀通水一五〇年記念事業実行委員会編『二宮尊徳と久保田讓之助―最後の仕法が拓いた未来―』二〇一九年  
堀野周平『日光県開墾仕法と栃木の近代―その後の報徳仕法―』随想舎、二〇二四年



▲岡久保田堀

粟野コミュニティセンター付近を流れ現在も利用されている。

## 日光の社寺を守った安生順四郎

栃木県を代表する場所というと、日光東照宮をあげる人が多いと思います。現在、世界文化遺産になっている日光東照宮・日光山輪王寺・日光二荒山神社を守ったキーマンの一人が久野村の安生順四郎です。

### ●初代県議会議長

順四郎は弘化四年（一八四七）、久野村に生まれました。成長すると深程村の中條若処（なつかじょうじやくしよ）の塾に通い、その後、江戸行ってさらに勉強を重ねました。明治六年（一八七三）以降は、戸長（今の村長）などの公職を歴任しました。明治一二年（一八七九）、栃木県ではじめて県会（現在の県議会）議員選挙が行われました。順四郎は、この選挙で当選し、第一回県会で初代の議長に選出されます。この後、順四郎は、明治一七年（一八八四）まで県議員を務め、明治一九年（一八八六）からは上都賀郡長も務めました。

### ●荒廃する日光山の社寺

順四郎が公職について活躍していた頃、長い歴史をほこる日光の社寺は危機的な状況にありました。日光東照宮をはじめとする日光の社寺は、江戸幕府の初代将軍である徳川家康と三代

将軍家光をまつるため、徳川家から深く信仰されていました。

しかし、明治維新によって江戸幕府が崩壊したことで、日光の社寺は大きな後ろ盾を失ってしまいました。さらに、新しく成立した明治政府は、それまで一体になっていた神道と仏教の分離（神仏分離）を進めます。これによって日光の社寺は、自力で建物や文化財を守っていくことが難しくなっていました。

### ●うまくいかない日光の保護

明治八年（一八七五）、安生順四郎は荒廃しつつあった日光の社寺を救うために、栃木県内の有志者と一緒に東京に行って、新政府の関係者や徳川家ゆかりの人びとを訪問しました。しかし、成立間もない政府には、日光の文化財を保護する余裕はなく、この上京は、失敗に終わりました。

ところが翌年、東北巡幸に向かう明治天皇が日光に立ち寄り、解体されてしまっていた三仏堂の移築費用として三〇〇〇円を下賜します。すると日光の文化財保護が注目されるようになります。

さらに明治一二年（一八七九）七月にはアメリカ合衆国のグラント元大統領が日光を訪ねてきました。順四郎たち有志は、グラントに随行してきた伊藤博文内務卿に面会し、日光の保存について改めて嘆願しました。しかし、伊藤も政府に日光を保

護する力はないとして、順四郎たちの願い出を受け入れませんでした。

### ●保晃会の結成

政府の援助が期待できないと分かった順四郎たちは、自分たちで日光の社寺の保存を行う民間団体の設立を決意します。こうして、明治一二年（一八七九）八月、順四郎をはじめとする栃木県内の名士二一名が満願寺（今の輪王寺）に集まり、「日光」（晃）を「保」護する会「保晃会」を結成したのです。明治一三年には栃木町で設立総会が開かれ、会長に東照宮宮司の松平容保（元会津藩主）が、副会長に順四郎が選出されました。

副会長になった順四郎は、明治天皇・政府・栃木県からの援助や、全国の有志たちからの寄附を集め、日光の社寺の修繕を進めました。明治二九年（一八九六）には会員数は一万二九三



▲保晃金請取証（鹿沼市教育委員会所蔵）

九名にまで拡大しました。そして、大正五年（一九一六）、順四郎の尽力によって設立された保晃会は解散し、その役目を終えたのです。



▲安生順四郎肖像（『栃木県議会史 第1巻』（栃木県議会、1983年）より転載）

### 《参考文献》

- 石川明範「保晃会―日光の保存につくした人々」（栃木県歴史文化研究会近代日光史セミナー編『日光近代学事始』随想舎、一九九七年）
- 松尾元保『ふるさと人物伝 粟野の人びと』粟野町役場、二〇〇一年
- 丸茂博「栃木県における明治一〇年代の郡長」『栃木県立文書間研究紀要』第一七号、栃木県立文書館、二〇一三年

## 農村に夢を描いた野本貢と色川大吉

昭和二二年（一九四七）四月、戦後の学制改革に伴い、粕尾村に粕尾中学校が設立されました。翌二三年四月、同中学校に、二人の青年が教員として着任しました。東京大学を卒業したばかりの野本貢（二九歳）と色川大吉（二三歳）です。

### ●野本貢の家系

野本貢は、大正八年（一九一九）、中粕尾に生まれました。自転車ハンドルの書見器を取り付けて、朗読しながら宇都宮の中学校まで通ったという挿話があります（危険なので皆さんは真似しないでくださいね）。そして苦学の末、東京帝国大学に入学しました。

貢の祖父・野本相考は、粕尾村を領地とした武蔵国金沢六浦藩主・米倉丹後守の家臣であった関根家に生まれ、後に野本家の養子となりました。相考は、明治二〇年（一八八七）に中粕尾村・下粕尾村・上粕尾村の戸長になり、同二二年、町村制が施行され三村が合併し賀蘇尾村（後に粕尾村）となると、そのまま村長となりました。明治三〇年まで、一〇年間村長職を勤め上げた後も用務員として役場に残り、二代目村長・倉沢源内をよく助けたといえます。

ちなみに倉沢源内は、「源蔵日記」（82ページ）を書いた倉

沢源蔵の子になります。

### ●二人の挑戦

「東京大学といえば日本の最高学府、しかもその俊才がこの地（粕尾）に赴任するとは、村人から見れば奇異であり、異例でもあった」色川たちの着任と同じ昭和二三年度の入学生であった駒場一男氏（鹿沼市文化財保護審議会委員）は、こう振り返ります。

色川と野本は、ある思いを秘めて粕尾にやってきたのでした。「民衆の中へ」の思いがあったのは確か。敗戦から二年余で農地改革のまったただ中。農村に入り、指導することで改革を進めることができるはずだ。そう思ったのです（「朝日新聞夕刊」平成二〇年七月一五日）。粕尾に來た理由を色川大吉は後にこのように回想しました。「民衆の中へ（ヴナロード）」はロシア革命のとき、知識人が農村に入って農民たちを革命に立ち上げさせようとしたスローガンです。戦後、中国では蒋介石の国民政府と毛沢東ら中国共産党が争う国共内戦が再燃し、また国内では戦時中弾圧されていた共産党が復活し国会での議席を獲得するなど、社会変革の機運が高まっていました。

こうした中、色川たちは野本の地元である粕尾で、住民たちを啓発し古い封建的な社会の変革を実践しようとしたのです。二人は昼間は中学校で生徒たちを教え、夜間は地元の青年たち

を相手に集会を開くなど精力的に活動を展開します。しかしこうした急進的な動きや教育方針の違いは、他の教員や地域の有力者との間にあつれきを生じさせることにもなりました。

やがて、昼夜なく駆け回った過労が祟ったのか、野本は教壇で倒れます。心臓病を発症しており、大病院に入院しましたが、着任と同じ年の一二月に亡くなりました。粕尾中学校で教鞭を取ったのはわずか九カ月という短い期間でした。教え子として告別式に参列した駒場氏は、号泣しながら弔辞を述べる色川の姿を今でも覚えていいるそうです。

### ●色川史学の原点

野本が亡くなった翌年四月、色川もまた粕尾を去り東京に戻りました。昭和二四年（一九四九）には彼が中心となり『草深き丘に』と題する野本貢の遺稿集がまとめられています。

山村の人々を教え導き新しい歴史を刻もうとした若い二人の夢は挫折しました。色川が粕尾にいたのは一年間程でしたが、自由民権運動の研究などで日本を代表する歴史家となった後も、その著作で度たび野本や粕尾での日々を回想しています。また、三〇年後再び粕尾を訪れた色川は当時の教え子たちと涙ながらの再会を果たしました。「その後の僕の民衆史研究は、間違いなくこの村（粕尾）で始まったのです」（『朝日新聞夕刊』同前）。名もなき人たちが歴史を作っていくという色川独自の思想や歴

史観の原点、そのひとつが粕尾での日々にあったといえるでしょう。

#### 《参考文献》

『草深き丘に 野本貢遺稿』私家版、一九四九年  
『粕尾中学校閉校記念誌 鳩友の丘』粕尾中学校、二〇〇三年  
色川大吉『ある昭和史・自分史の試み』中央公論社、一九七五年



▲中粕尾から望む横根山

野本が愛し水彩画にも描いたという。